

## 満洲移民女性に対する戦時性暴力の政治学

京都大学  
猪股祐介

本報告の目的は、満洲移民女性に対する戦時性暴力が、日本敗戦後の開拓団・日本人・ソ連兵による、単身女性団員の性をめぐる政治学により構築された過程を明らかにすることで、戦時性暴力を脱自然化することである。聞き書きや体験談より、ソ連兵による強姦や義勇軍開拓団による強姦を分析する。

岐阜県郡上村開拓団や黒川開拓団に対する聞き取り調査や満洲移民体験者による手記より、ソ連兵の進駐に際し、出征兵士の妻が守られ単身女性が「慰安婦」とされた事例や、日本人収容所において義勇軍開拓団をなだめるために単身女性が「提供」された事例を分析することで、戦時性暴力の被害者がホモ・ソーシャリティ（男性同盟主義）や共同性の維持という政治学に基づき、選別されたことを明らかにする。

ソ連参戦後のソ連兵による戦時性暴力には、2つのパターンがある。一つは郡上村開拓団における幹部男性の行動に起因する強姦である。偶発的にみえる強姦も、幹部団員とその他団員の避難施設が異なるなど、幹部男性の思惑によるところが大きかった。もう一つは黒川開拓団での「慰安所」での戦時性暴力である。幹部男性の思惑が先鋭化した例である。義勇軍開拓団と開拓団女性の結婚もまた、幹部男性の命令によるものであった。だがこれらは戦後「開拓団の犠牲」として、幹部男性の加害性は不問に付される。

引揚後、開拓団の多くは2つの回路を通じて再集団化した。一つは戦後開拓を通じて、もう一つは旧入植地の墓参を通じてである。黒川開拓団の事例でみたように、旧入植地の墓参では「被害者共同体」として再集団化した。女性、なかでも「慰安所」の被害者は「尊い犠牲者」となった。開拓団という共同性を通して、彼女らは自らの経験を内集団に向けては「語る」行為者となれた。ただ彼女や開拓団が、外集団に向かって、強姦という「過剰な」犠牲を語ることはなかった。開拓団という共同性は両義的である。一方で被害者同士が語り合える内集団を形成せしめる。他方で幹部男性が彼女らをソ連兵に提供した加害性を隠蔽する。

黒川開拓団ではいまなお、満洲体験を持たない二世により、共同性が維持されようとしている。開拓団が担った共同性は維持すべきである。それが戦時性暴力の被害者の内集団形成を支えているのは確かである。だが今後は「開拓団」とは異なる共同性を構築すべきである。生存者に語りを強要する暴力は厳に慎まねばならない。他方で、彼女らから語りたいたいという呼びかけがあり、それに応答できる時間は残り少ない。